

## この章のまとめ

この章では、冠詞を決める要素として、コンテキスト (文脈) について検討しました。

- コンテキスト (文脈) というと、あいまいな響きもするが、それは私たちがふだん、冠詞のない言葉である日本語を使っているからである。
- 英語では、日本語では「何となく」ですませて、その場の空気にゆだねてしまっている文と文のつながりを、冠詞や決定詞を使ってきちんと示す。
- コンテキストとtheの関係には、前に出てきたものを指すthe、後ろから限定されるthe、状況によって限定されるtheの3つがある。
- 学術論文などでは、this / thatを使うことによって、theを使うよりも、さらに前に出てきた語とのつながりを明確にしていく。
- 語と語のつながり、特に動詞と名詞のつながりでは、冠詞は重要なはたらきをする。冠詞の有無によって、文の意味が、よりはっきりしてきたり、動詞の意味がしぼられてくることもある。I had a chicken. とI had chicken. やI hate a girl とI hate girls. の違いなどはその一例。

## 第9章 theの不思議 (区別する力)

**2**章の冒頭でも触れましたが、筆者は、aとtheを「冠詞」とひとくくりにして、ことさら特殊視することは、あまり賛成しません。aとtheをひとまとめで考えると、aとtheの微妙な違いがわからなくなる危険があるからです。

たしかに、aとtheは、他の単語、たとえば、flowerやrunとは異なり、モノや動作の意味をもつ単語ではありません。もっと記号的な役割をします。5章では、このような冠詞の記号的役割を「矢印のイメージ」で説明しました。aとtheは、他の単語と並べてみると共通の特殊性があるのです。しかし、それにもかかわらず、**aとtheは決して補完的な関係にはありません。**

aとtheを同時に1つの名詞に付けることはできないので、私たちは英文を書いているときに、「ここはaの場面ではないからtheを付けておこうか」みたいな、「aではないからthe」(これが先ほど「補完的」と呼んだものです)という考え方をしてしまいます。

しかし、もう一步英語の理解を深めていくためには、こういった考え方は表面的すぎるように思われます。theは、「aを付ける場面でもなければ、無冠詞の場面でもないのだからtheを付けておく」というような、便宜的な理解をこえた、独自の世界を作りだしています。

この章では、そういった、theのもつ「不思議」に焦点を当てていくことにします。